

ニート・ひきこもりの生きづらさとニーズについての考察

～当事者への聞き取り調査を踏まえて～

執筆時 学部福祉援助学科4年（2008年卒） 宮 下 穰

1. 本テーマを設定した動機

私は、大学を卒業後自分の進路をなかなか定めることができず、大学から会社へというルートから外れてしまった。その後の就職活動は困難を極め、次第に対人関係にも息苦しさを感じるようになり、短期間働いては引きこもることを繰り返すようになってしまった。定職に就けないまま30歳を過ぎてしまい、焦りを感じて2004年秋に、この年の春に開設されたばかりのヤングハローワークに相談に行った。その時職員に、「今までどうやって生活をしていた？親のすねをかじっていたのか？」と言われ、その言葉に押し潰されそうになった。そのような状況の中で年齢ばかり重ねて仕事の能力は身につかないため、ますます状況は悪くなった。

そのような個人の事情を無視して、一方的に怠けや甘えだと批判されることに悔しさと憤りを感じずにはいられなかった。もし、「ニート」¹や「引きこもり」²と言われ批判されている若者の中に自分のような状況を抱えている人がいるとしたら、若者批判をする社会や大人達に当事者の現状を伝え問題提起をしていく必要があるのではないかと考えた。日本では「ニート」の定義から失業者を除外したこと等により、「ニート」イコール働く意思のない甘えた若者というイメージが定着した印象がある。

ここ数年の間に、政府も若年者支援に力を入れるようになってきた。しかし政府の若年者支援は、外面からの規定により彼らを一律にカテゴリー化し、若者自身の意識を変えてコミュニケーションの能力をつけさせるという色彩が濃い。また、

個々が抱えている「生きづらさ」よりは若年雇用情勢の悪化による日本経済の停滞、少子化の加速などを防ぐことに焦点が当たっている。

このような本人の主体性を無視した一方的な支援のあり方は、本人の意見や実態にそぐわないばかりでなく、本人を追い詰め傷つけることになるのではないだろうか。そこで私は、彼ら一人一人の立場や主体性を尊重した支援のあり方の必要性和引きこもりやニートの体験の意義を、当事者の立場から考えたいと強く感じたのである、

2. 研究の目的と方法

そこで本論文では、以下の3つの目的に沿って研究を行った。1つは、当事者の声に耳を傾け、ニートや引きこもりといわれる若者が、具体的にどのような状況でどのようなことを困難に感じているのか、自分の体験をどのように捉えどのように生きていこうとしているのかを探ることである。2つめは「働く意欲のない自分に自信のもてない若者達」という社会一般に定着しているニート、引きこもりのイメージと彼らの実像との違いを示すことである。そして3つめは、政府の行う支援策は、ニート、引きこもりの若者の意見、望みやニーズを十分に反映していないことを示すことである。

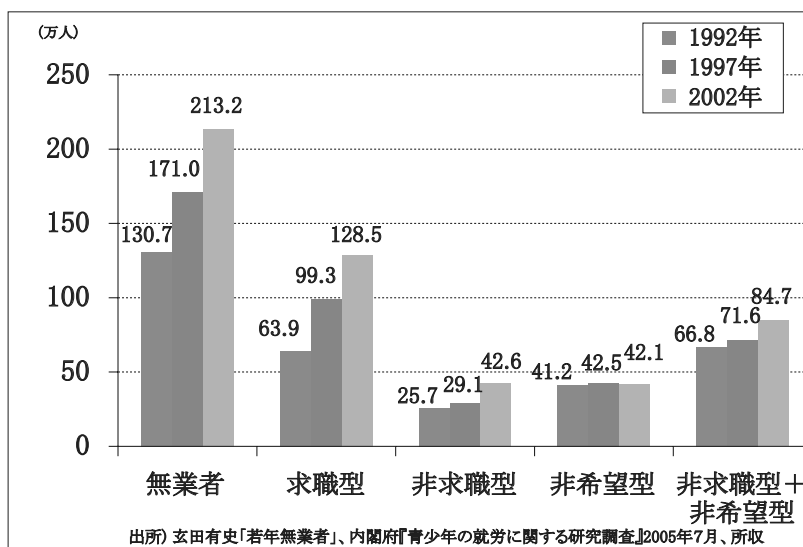
本研究では、文献調査と当事者への聞き取り調査を行った。文献研究では、政府刊行物や統計資料の分析により若者をめぐる社会情勢を把握すると共に、著書を通じてニート、引きこもり論とその支援のあり方に関する学説の検証を行った。また聞き取り調査では、調査対象を、年齢が18歳から35歳くらいまでで、現在若しくは過去に無業もし

くは継続して就労することが困難な状態を体験している若者3名とした。

事前に質問項目を作成して研究の目的で明らかにしたい事実が得られるように、また本人の苦悩や思いをできるだけ率直かつ自由に語ってもらえるように留意した。聞き取りを終えた後速やかに原稿を作成して当事者に送り、内容の確認と最終的な掲載の承諾を得た。本調査では、聞き取り調査結果そのものに事実を語らせ、本人の考え方や思いを抽出していくというスタンスを採った。

3. 調査結果の概略

文献研究は、ニートや引きこもりの増加と固定化の背景として若者の生きづらさがあることが見えてきた。すなわち、1992年から2002年までの10年間にニート（図1 非求職型＋非希望型）は約18万人増えているが、同じ10年間で若年失業者（図1 求職型）は65万人、フリーターは112万人も増えている（本田〈2006〉）³。



また日本では、フロントエンドな教育システム⁴と新卒一括採用の慣行が現在も色濃く残っており、一度このルート外れた若年者は新卒採用枠から締め出され、ある程度の職務経験が要求される中途採用市場にも参入できないまま、不安定雇用従事者⁵や無業者となって滞留している。さらに彼らが正社員になろうとしても企業から厳しい評価を受けてしまうこと等により、その状態から抜け出すことは容易ではない。一方、政府は若者自立塾やジュニアインターンシップなどの若年者支援策を実施し始めている。しかし政府の若年者支援対策は、ニートやフリーターを予防し、若者を訓練教育して企業の求める人材に適合させていこうという傾向が見られ、30歳を超え年長となったニートや引きこもりの若者への対応が不十分であ

り企業の労働条件や採用における裁量を規制するという視点が欠けている。

ニートや引きこもりに関する学説では、彼らをマイナスの存在としてみるものと肯定的に受け止めるようにするものに分かれる。前者では、本人の状態を外面から規定して社会的不適応状態にある（斉藤〈1998〉）⁶又は将来の社会的なコストになる恐れがある（小杉〈2005〉）⁷ので、できるだけ早く引き出して支援していくべきとすることに特徴がある。後者では、本人が自分らしさの危機から自分を守り、自分自身を見つめなおし成長していくための道程としてニートや引きこもりを擁護するべきとすることに特徴がある（芹沢〈2002〉⁸、高岡〈2003〉⁹）。また、「日本版ニート」¹⁰という線引きが、本来は福祉政策や労働経済対策で対応してい

くべき問題を本人の自己責任問題にすり替えていると指摘する学説（本田〈2006〉）もみられる。

当事者への聞き取り調査では、彼らは皆働きたいという気持ちを持っており、家族以外の第3者との関係が一切なく家に引きこもった状態を非常に息苦しく感じていることが分かった。政府の支援対策についてもそれが現状打開のきっかけになるのなら否定しないという意見が多かった。しかし、彼らは自分から家族以外の第3者との関係を求めそのきっかけを掴んでいる。それは、彼らにとって次の一步を踏み出すきっかけを得る場になっており、ありのままの自分を認めてくれる安心できる場でもある。そこで今までとは違う新しい価値や考えに触れ自分を見つめなおしている。また、本人は働きたいという気持ちを強く持っても、周囲に理解して受け止めてくれる場と職業につながる機会がなければ安定して働いていくことが難しいことが分かった。

その一方で、引きこもりやニートの体験は当事者の数だけ違う体験があり、抱えている状況や困難も様々であること、及びこれから先の目標もそれぞれ違っていることも見えてきた。

4. 考察のまとめ

文献調査や聞き取り調査から得られた事実を基に、ニートや引きこもりに対する社会の見方の特徴と問題点、ニートや引きこもりの意義、ニートや引きこもりの期間の保証と当事者に寄り添った支援の必要性について考察を行った。

社会の見方の問題点は、本人がどのような事情を抱え、どのようなことを考えながら日々生活しているのかということとは無関係に、その人を外から見た状態像で一方的にその人全体を評価して排除しがちなことであると考えている。私は聞き取り調査の分析を通じて、外から見ただけでは一見変わらない状態に見えても、内面は時間を追って絶えず変化していることに気づいた。そこでニートや引きこもりの期間は、自分らしさを脅され傷ついた自分を癒し、自分を見つめ直し試行錯

誤する中でこれまでとは違う新しい価値観や生き方と出会い、これからの生き方を自分で模索していくという意味があるのではないかと考える。しかし、このような作業は自己破壊という危険を伴う。

安全にこの期間を保証するためには、家族や身近な社会の中に彼らのありのままを受け止め自主性を尊重する存在や場所が不可欠である。またこのような場合は、社会に出た後もいざとなったら帰ってこられる安心できる場としての意味もある。さらに、引きこもりや長期間働いていなかった若者が再び社会に出て働くのに当たり助走や訓練ができる場がなければ、強制的に元の生活に戻されてしまう可能性がある。このように、ニートや引きこもりの若者を支援するには、当事者本人の歴史や内面の動きを無視することはできない。そのためには、本人に関わり続けながらじっくりと本人の声に耳を傾け、本人が自分の満足する道を選び歩んでいけるように支援することが求められると考えている。

5. 私の提言

本人が利用する、本人を支援する資源は多様で柔軟に選べるものが望ましいと考える。例えば、企業の正社員を最終目標に据えるだけではなく、個人がやっているお店で働かせてもらう、自分が得意な科目を出張で教える、弁護士の事務所で見習いをする、体の不自由な住民の買い物を手伝うといったことも可能になるように、地域にある資源を開拓していくことも良いのではないかなと思う。そのためには、今あるフリースペースやNPO法人が地域の様々な職業や年齢の人に解放されて、引きこもりやニート支援という縛りを超えた機能を獲得していくことが求められる。人と人が交わることで、新しい機会が開けて選択の幅も広がっていくに違いない。また、年齢も立場も違う大人や子供が集う場があることで、今までと違う考え方や生き方に触れて自分を見つめなおす機会も増えるのではないだろうか。

終わりに

本研究では、できる限り幅広く文献を集め当事者への聞き取り調査を行うことを通じて、彼らが直面している現実やそれぞれが抱えている問題の多様性や思いをしっかりと受け止めることの大切さを訴えたつもりである。同時に本研究では自分にとって、自分自身の今までの生き方を整理してこれからの生き方を模索するという意味もあった。このような思いが研究を進める支えになった。本研究を目にした方にとって、生きづらい時代を少しでも生きやすくすることについて考えるきっかけになることを願っている。

注， 参考文献

- 1 「ニート」(NEET= Not in Education, Employment, or Training) とは、イギリスで生まれた言葉であり、小杉礼子のグループ（労働政策研究研修機構）が最初に日本に紹介した。
- 2 「引きこもり」とは、病名ではなく引きこもっている状態（現象）を表す言葉である。
- 3 本田有紀・内藤朝雄・後藤和智(2006)『「ニート」っていうな！』 光文社
- 4 1つの学校の終わりが即時次の学校の始まりとなっている日本の教育システム。
- 5 いわゆる非正規雇用従事者のことで、雇用形態としてパート、アルバイト、派遣社員、嘱託社員のほか、有期雇用契約などで働くものを指す。
- 6 斉藤環(1998)『社会的ひきこもり 終わらない思春期』 PHP 新書
- 7 小杉礼子(2005)『フリーターとニート』 頸草書房
- 8 芹沢俊介(2002)『引きこもりという情熱』 雲母書房
- 9 高岡健(2003)『引きこもりを恐れず』 ウェイツ
- 10 ここでは、内閣府 (2005)『青少年の社会的自立に関する意識調査』の定義を指している。すなわち、15歳から34歳の若者の中で、学生でない未婚者でかつ働いておらず、求職活動もとっていない人を意味している。